

常季じょうき曰いわく、何なんの謂いいぞやと。仲尼ちゅうじ曰いわく、其その異いなる者ものより視みれば、肝胆かんたんも楚越そえつなり。其その同じき者ものより視みれば、万物ばんぶつも皆みな一いちなり。夫それ然かくの若ごとき者ものは、心こころを徳とくの和わに遊あそばしめ、物ものに其その一いちなる所ところを視みて、其その喪うしなう所ところを視みず、其その足あしを喪うしなうを視みること、猶なお土つちを遺おとすがごときなりと。常季じょうき曰いわく、彼かれは己おのれを為おさむるに、其その知ちを以もつて其その心こころを得え、其その心こころを以もつて其その常心じょうしんを得えたり。物何ものなんす為なれぞこれに最あつまるや。仲尼ちゅうじ曰いわく、人ひとは流水りゅうすいに鑑かがみすること莫なくして、止水しすいに鑑かがみす。唯ただ止しにして能よく衆止しゅうしを止とどむ。

【大体の意味内容】

常季じょうきはいう、「その、『事物じぶつの変化へんかを運命うんめいとし、背後はいごにある宇宙うちゅうの根本道理こんぽんどうりを守る』とはどういうことですか。」

孔子こうしは答こたえた、「ものごととはそれぞれ違ちがう、という点てんから見ると、肝臓かんぞうと胆嚢たんのうとの隔へだたりでさえ、楚そと越えつとの間あいだほどひらくことになる。しかし、物ものごとの共通きょうつうした点てんから見ると、万物ばんぶつは一つである。

王駘おうたいのような人ひとは、心こころを徳とくの調和ちょうわした境地きょうちに遊あそばせ、万物ばんぶつの一いちである本質ほんしつを見て、表面的ひょうめんてきな喪失そうしつに目めを奪うばわれたりはしない。自分じぶんの足あしを喪うしなったことも、泥どろが落ちた、ぐらいに思おもっているのだ。」

常季じょうきはまた言いう、「あの人は自分の修養しゅうようにあたって、知性ちせいによって心こころをコントロールし、

その心こころによって、何事なにごとにも動揺どうようしない平常心へいじょうしんを得えました。(ただ冷静れいせいであるというだけで)

世よの中なかの人ひとや物ものがその周囲しゅういに集あつまってくるのはどうしてなのでしょう。」

孔子は答えた、「人は流れている水面を鏡として自分の姿を映してみることはせず、静止した水面を鏡とする。冷静に静止しているからこそ、人々の本質を映し出す鑑として、大衆を自分の前にとどめてしまうのだ。」

前回の「足切りの刑」を受けた聖人、王駘の話の続きです。

常季という人は企業の経営者のような人かもしれませんが。王駘という、不遇の身でありながら高い知性を持った人物に興味を持ち、その指導者としての「成功」に何か政治力や経営力のようなノウハウを隠し持っているのではないかと疑って、関心はそこにあるようです。それに対して孔子は、王駘自身はべつに大衆に支持されることを目的として何らかの手腕をふるっているのではなく、純粋に宇宙秩序との調和を図る生き方に徹し、結果として人々が彼の薫陶を受けようと思集まってきているだけなのだと言わけています。

「人は流水に鑑すること莫くして、止水に鑑す」とは蓋し名言です。波立っている水面でも何も映りませんが、静止した水面にこそ物は映る。実物よりも、鏡に映ったモノのほうにこそ、何か本質までが反映されているのではないか、人々はなぜかそう直観してしまうのです。

『老子』の他にも「葉っぱにおかれた一滴の露は、天の全体が映る」という話を讀みました。剣豪宮本武蔵の書「戦氣」にも、その添え書きとして「寒流月帯びて澄めること鏡の如し」とあるのを見てきました。命をかける緊迫の場面こそ、鏡の様な「止水」の境地に在ることが大事。

ラグビーのワールドカップが大変な盛り上がりようで、異様な熱狂の渦を起していますが、その中でほとんど笑わずに、けれどタフなプレーに徹する選手たちの存在に注目が集まっています。日本人だけでなく、外国人選手にもそんな人が目立ちます。あの激しいプレーで闘志をむき出していているように、実はそんな自分を鏡のような冷徹な知性で俯瞰しコントロールしているのではないでしょうか。

その冷徹さで、一試合ごとに相手の力を吸収し、自分たちを増強させているありさまに感嘆します。心を乱さず禅の境地で臨むことが、大いなる世界とつながりそのはたらきを得ることになるでしょう。彼らはいつかどこか知っているのではありませんか。

台風の被災者たちにはまず思いを寄せる」笑わぬ壮士たち」の顔が、本当に侍のようにも哲学者のようにも見えませんでした。